

いまは恋しい、ケイという女



佐山雄次

その晩、ポップスの調べをデュエットしておりますと、ひよっこり、あの人が見えたのですが、私だけ止めるわけにいきませんから、そのまま素知らぬふりをして歌っていました。

けれども、それとなく様子をうかがっていると、あの人は入ってすぐのカウンターの縁ふちに継り付くようにして、はあっはあっ、という荒い呼吸をされているようで、そのうち夕霧の差しだしたコップの水を一気に飲み干すほどでしたから、ようよう伴奏が終わるのを待たずにそちらに行つて、

「いらっしやいませ。どうか、なさいました？」  
と尋ねますと、

「や！ ケイさんだったか」

と、私の顔を見て吃驚びっくりしたようでした。

そうなる、何のことはありません。この「ジョアンナ」どころか、尚更のこと、私がお目当てというのでもなかったようです。がっかりしました、それこそ糠喜びではありませんか。そういうことでしたら、何かに追われて、やみくもに飛び込んで来られたのでしょうか。まさか野良犬などということは無いでしょうから、もしや誰かに付け狙われたのかもしれない。なんとかして追っ手の目をくらすために、何処でもいいから、あてずっぽうに逃げ込まなければならなかったのでしょうか。そう考えると、やにわに夫のことが思い出されました。

夫は、やはり晩秋の宵、ところかまわず逃げ回ったそうで、挙句の果てに、とうとう射殺されてしまった。これより十年の昔になりますから、私が二十七歳のときでしたが、その話を夫の舎弟分にあたる与三郎から聴かされると、私は嘆き悲しむというより、全身に水を浴びせられたように、ぞっとしました。そっくり我が身に降り懸かったことのように感じたからです。それほどおそろしい目に遭わせるくらいなら、たかが加勢だからといって、なまじ神戸になど遣りはいたしませんでした。およそ下手人は分かっていました、おそらく瀬戸内海の淡路島をまたいで四国の鳴

門にわたり、またもや高知へと逃げ込んだのに違いないのです。何故なら、その土地の者によって、その前の夫も撃ち殺されていたからに他なりません。

どうして助太刀風情を目の敵にするのか、そこがどうにも気になっておりましたし、そうは思いたくなかったのですが、こんども遅かれ早かれ、と案じていた矢先のできごとでした。思えば、しきりに胸騒ぎがしたのは虫の知らせでしょうか。その夜、すっかりしよげ返った与三郎を帰すと、私は、あることに気が付きました。たしかに虫の知らせであれば、こういうことも考えられるだろう。

先ほど聞いた話は、なんの根拠もない夢物語かもしれません。いや、きっと夢を見たにきまっています。

——いわれのない夢でしたら、いますぐ醒めてください！ いつまでも、私を苦しめないでください。……

この世に神はいないものでしょうか。なんとしても諦め切れず夜どおし死に物狂いでお願いしましたが、やはり奇跡は起きませんでした——。

何事につけ世間から一目置かれる、それなりに由緒正しい私の生家は、その稼業が栄えたら栄えただ、それに伴い危うい立場にも置かれるのでございます。そうした巡り合わせとは言いまでも、これは世間一般にあてはまるのかもしれませんが、なにぶん競争が激しすぎるせいなのでしょう。ですから次々と夫が殺害されたのも、お互いの利権を巡って、やむにやまれぬ抗争に巻き込まれた挙句のことでしたのです。

もっとも、これには相手方(対抗組織)の言い分もありまして、

「あのシマ(縄張)は、それまで、こっちのものだった」

と主張して譲ろうといたしません。

ここで「シマ」と申しますのは、とくに断わらなければ、かつて遊郭があったとか私娼がたむろしていたとか、そういうった界隈をさしますから、たいがい色町のことを言うのでございます。また、それまでとは何時のことかと申しますと、なんと明治の時代に廃藩置県がおこなわれた折だそうで、そのドサクサに紛れて掠め取られてしまった。そんな言い伝えを後生大事に守り抜いてきたという話でして、それが間違いなければ、いくら渡世人同士の取り決めだからといって、まことに畏れ多いふるまいではありませんか。

こうなると、どっちもどっちということになりますが、翻って考えてみるに、ご

先祖に義理を立てるわけですから、たとえ命に懸けても守らなければならぬ仁義なのでございます。それほど大事なしきたりでしたら、ときにより犠牲者を出してまで繰り返し争うのは、やむをえないのかもしれませんが。けれど他にも理由わけがあるようで、とかく男の社会は女には分からないところがありまして、こうでもして勢力を競い合わなければ、とうてい身内の士気を高めることが、できないらしいでございます。

だからといって、他人事ではありません。こう立てつづけに夫が犠牲になったのでは、おめおめと引き下がっていただけません。

「こんどから、たつての父の頼みであつても」

と言いかけては、言葉に詰まり、

「きつと断わるようにしますから、どうか赦してください」

と二つ並んだ位牌を前にして、ぼろぼろ涙をこぼしながら、

「嗚呼、あなた、ごめんなさい。とつても痛かったでしょう、よっぽど苦しかったでしょうね。こんな取り返しとりかへの付かないありさまにさせて、ほんとうに、ごめんなさい」

と何度も謝って、それだけで済むはずがありませんから、

「なにがお互いさまよ！ これっきり加勢の遣り取りなどしませんからね。この博多には金輪際かかわらないでおくれ！」

と六甲から遣つてきた父にむかつて、きつく言つてやりました。

ですがどういふことでしょうか、みるみる涙が湧き出して、夫の位牌が霞んで見えなくなりました。

あのときは目の前が真っ暗になってしまい、何もかも私のせいだから、私さえいなければ、と二人の夫の後を追おうとしました。しかし父から親身になって説得され、これまで痛恨の想いで生きてきましたが、

「そういえば『ジョアンナ・シムカス』ついていたな」

と、あの人が声を掛けてまいりました。私は、こんどは逃げ果せてくれたのだわ、と安心したせいでしょうか、

「そうね、レティシアよ」

と思わず口を吐いていました。

どうやら頭が混乱していたようで、いまごろになって、はっと我にかえりました。

それなら何のことかと言いますと、いつしか夢中になってスクリーンに見入ったときのことでございます。あの折は、きらきらと煌くまばゆいばかりの海と空の青さに圧倒されました、なかでもレティシア役のジョアンナ・シムカスが、どこことなく憂いを漂わせる容姿でいながら、やることはてきぱきとして、なんて素敵な方だろうと思いました。

こういう話になりますと、なにやら晴れ晴れとしてまいりました。たわいもない女かもしれませんが、かつて死に物狂いで一夜を明かした日より十年もの歳月がながれたからでしょうか、たまには天神の映画館に足を運ぶ余裕も出てきたのでした。

そういうわけで、あの折の女優がむやみに気に入ったものですから、この呼び名を「ジョアンナ」とさせていただいたのですが、べつにフランス政府に断わらなくていいのでしょね、と言おうとして、とっさに閃いたのでございます。ですから、「ようこそ、ジェフ」

そのとおりに呼び掛けてみますと、  
「なるほど、そうきたか」

あの人は相槌を打つに留めるのでした。それと申しますのも、このように何人かの男の人たちがいるのに、そのカウンターの内<sup>なか</sup>でみんなをもてなす女主人と、もっぱら二人だけの話にかまけるといえるのは、いかがなものでしょうか。それに、このみんなはワケアリの人たちばかりですから、なにぶん本名を明かすようなマネはなさらず、その代わり、仮の名前で呼び合っていますので、あの人は、そのことも逸早く察したのでございましょう。

それにしても、たとえ偽りの名前であろうと、なんととってもフランス映画の主人公「ジェフ」なんですからね。あくまで物静かに使命を全うする、そんな武士道を弁えた孤独な請負人となれば、私には誰より無性に頼もしく思われ、つとカウンターの前の人たちを一通りざっと見回し、だしぬけに声を発しておりました。

「この方はジェフよ。ねえ、そうでしょう！」

みんなが目を白黒させるのを尻目に、私は、なんだかやたらに嬉しゅうございまして。

その時刻になりますと、新たなホステスを充てがおうにも、なにぶんお茶を挽く娘が見当たりません。ですからマネージャーはボックス席のお客をなだめるのに、ほとほと梃摺っていたようです。こうしたことは、よくございまして、そこに、あの人が見えると、あたふたと迎えるマネージャーには目もくれず、ただちにこちらのほうへ歩み寄って来られました。私は、その様子を見て微笑んでいたのですが、そのとき、あの人の視線を感じました。これではまるで、お店のホステスでもないのに、女のほうから誘っているようで、たちまち顔が火照ってまいりました。それだけならまだしも、そこへ持つてきて、あの人の細身のスーツを着こなす姿が、かつての夫を思い起こさせるのでございます。あれほど恋焦がれていっしょになったのに、ところかまわず逃げ回った挙句、とうとう射殺されてしまった。その夫の面影が、どういったものでしょうか、あの人の姿と二重写しに浮んできて、それはもうどうしようもなかったのです。

私がジョアンナを設える二年ほど前のことですが、そのころ中洲のナイトクラブの舞台上でピアノを弾いていると、三日にあげずこうしたありさまで、あの人はと言いますと、すでに止まり木に腰を乗せて、こちらに回しむけておりました。あの人が手にするスコッチのグラスに、ときおりミラーボールの光線が映えるのでしよう、その都度あの人の瞳を輝かせるのが、私には恋の炎が揺らめいているように思えてなりませんでした。

そうは申ししても、あのころは、何とはなしに月日がながれていきましたから、べつにどうってこともなかったのですが、このとき、

「なあ、ジェフ」

と声がいたします。

私は与三郎が呼び掛けてくれたのは嬉しかったけれど、みんながジェフを警戒しているのが分かっていましたから、さりげなく耳をそばだてていると、

「いいこと教えようか」

与三郎はこう言ってから、

「ケイがな、あるとき弦が一本切れたアコースティックギターを拾ったそうだと話し始めました。」

「そこは地の果てアルジェリア、じゃなかった、エトランジェの街ニューヨークだ。その下町の、ちっぽけな酒場で日本の童謡を奏でたつもりが、ケイの旋律は、そこはかたなく哀愁をたたえた。すると、いつのまにか、ぞくぞく人が集まって聴き入るようになる。これぞ東洋の神秘、ものあわれ、女の悲しみだ」

私は思わず噴き出しそうになりました。およそ柄にもないことを言うのですから、ひよいと可笑しさが込み上げてきたのです。そうしてジェフの顔を見ますと、彼は仕方なしに苦笑しながら、私に何か話し掛けました。すると、どこが気に入らなかったのでしょうか、

「まだ終わっちゃいねえ！」

与三郎が妙に力を込めて割り込んできました。

「このあとが凄い。ある晩、そのちっぽけな酒場にローリスロイス、じゃなかった、キヤデラックが乗り付けた。それからのケイは、マンハッタンのキラキラ星だ、その高級クラブで演奏するようになった」

「あら、よかったじゃない」

せつかくだから喜んであげると、

「おッ、<sup>あね</sup>姐さん、地獄耳だな」

と言いますから、

「なーにを、おっしゃる、ウサギさん」

と、節を付けて答えたのです。そうしますと、どつと沸きまして、  
「セロリばかり摘んでるから、ウサギさん、<sup>わだかま</sup>って言われるんだ」

と誰かが与三郎を揶揄したら、それまでの蟠りわだかまが一気にとけたようで、こういうとき与三郎はレアメタルかサファイアのように貴重な存在でして、それとなく私の気持ちを察してくれたのでしようが、何はともあれ一安心いたしました。

たしかに与三郎の言うように、私は若いころニューヨークの音楽学校に留学していましたから、うちの支部など、たいした稼ぎもありませんので、それぞれが仕事を工面してやりくりしておりますし、私自身も十年前に夫を亡くした折、本部を率いる父と張り合った手前、もういい加減に何らかの収入を得なくてはやっていけな

くなり、先ほど申しましたように、二年ほど前に中洲のナイトクラブの舞台に立てたのも、ほんとうはどうか分かりませんが、私としてはジャズ・ピアノをマスターしていたからだと思いたいのです。

このような回りくどい言い方をするには理由がありまして、何時も二つの位牌にお灯明をあげてメソメソしているばかりじゃ可哀そうだと、さっそく言い寄ってきたのが、そのナイトクラブのオーナーだったからです。私の夫が次々と撃ち殺されてから七、八年にもなるのを知っていながら、いかにも見え透いた口実で女に取り入るからには、こちらの足元を見られたに違いありません。そうと分かっているも、これ見よがしにメソメソするふりをしていたのは、どこかで気持ちに迷いがあったのだと思うのですが、そんな女の涙をオーナーは信じてしまったようで、うかうかしているうちに後妻として迎えられました。そうしましたら、その邸宅にはお手伝いさんも庭師もおりますし、何処にでも送り迎えする運転手までいましたから、何もすることがありません。そこでオーナーの勧めもあって、うちのクラブの舞台に再び出るようになった、というわけでございます。

それからはオーナーの妻という立場ですから、これまで思うだけで諦めていたシックな衣装を身にして舞台に出て行きますと、なんと様変わりでしょう、お客さんが総立ちになりました。そのうえ、こう言っただけなんです、私はからだ軀が華奢の割に背の高いほうで、どちらかという目鼻立ちもはっきりしておりますし、娘時分の二年にわたるニューヨークでの苦勞が役に立ったと思えばこそ、いっそう軽やかに演奏したくなりますから、いやがうえにも持て囃されるようになりました。いえ、これは自惚れでも何でもありません。あのころの私と言えば、お相撲の懸賞みたいに、たくさんチップを貰ったのですもの。

もちろんそこは、ひととき明るく照らしだされる舞台ですから、お客さんの視線が集まるのは当然ですが、そのなかで私は、いつしか真っ白いレースのドレスを身にしながら、ときおり舞台の袖近くで揺らめく恋の炎に、ひと知れず胸を躍らせるようになっていたのです。

ところが、好事魔多し、と申します。うっかり後妻に入って一年くらい経ちましたでしょうか、そのところの事情はあんまり詳しく話したくないのですが、とにかく突発的な心臓麻痺でオーナーが亡くなってしまったのでございます。

「嗚呼、あなた、ごめんなさい。そんなに無理をしているとは知りませんでした。



こんな取り返しの付かないありさまにさせて、ほんとうに、ごめんなさい」  
と三つめの位牌を前に、ぼろぼろ涙をこぼしながら、けれど私は、そこで、あることを思い付きました。

これからは、あの人に逢えなくなる、と涙をこぼしているだけでは仕方がないでしょう。それなら別の舞台に立てるようにすればいいのだから、むしろチャンス到来というわけではないのかしら――。

ちかごろは地元の反対運動に遭って事務所を設えるのもままなりません、もつとも、そのための資金もなかったけれど、まあ事務所と言っても、みんなが集まれる処であればいいわけで、かといって余り規模を広げては地元の住民の反発を買うでしょうから、オーナーが遺してくれた財産に比べればつましくするとして、その舞台にピアノを置くようにしましょう。

そうは思い描いても、いざ事を起こすとになると、なにしろ初めてのくわだてですから、どこから手を着けようかと考えました。けれども、そこは男の方のようにまわりません、あとから思い出すと、どうでもいいようなことまで考えあぐねて、何一つとしてきめられなかったのです。それでも私の決意を強く促したのは、それまでの浮ついた気持ちからではありません、やはり血筋は争えないと申しますか、二人目の夫の葬儀が営まれた晩、六甲から遣ってきた父に懇々と言い含められ、それ以来この博多の支部を預かる責任感からでございました。

それからはテナント募集の案内を当たりました、どうやら手頃な物件が見付かると、さっそく契約してインテリアや外装を施したり、そのいっぽうでオーナーの邸宅を売りに出したり、それに伴い私は以前に住んでいた処に引っ越したりと、この半年余りのあいだ忙しくしておりました。なに、オーナーの邸宅は維持費だけでも大変ですし、以前に住んでいた処は支部の者たちの拠り所として確保してありましたから、私は元の鞘に収まった迄のことで、ここでお断わりしておきますが、各々の所在地を明かささないのは、この業界のならいでございます。やがてジョアンナを設えて間もなく、あの人が訪ねてくれたのですが、それから度々お見えになりますと、あの晚いきなり飛び込んで来られた理由が、私には思い当たりました。

おかげでジョアンナのみんなが仲間意識を抱くのはいいのですが、そうになると、私だけ置いてきぼりを食わされたようで、それがまた不思議な感覚でして、なにせ細身のスーツを着こなす姿を見ると、そこに夫がいるような気持ちになるやら、

ああ、射殺された二番目の夫のことですが、しかしそうではないのですから氣樂に口を利くわけにもいきませんで、こうなると、あのころナイトクラブの舞台でピアノを弾きながら、ひと知れず胸を躍らせていたほうが、どんなによかったかと思われるやら、けれども、そのころは夫がおりましたので、ああ、心臓麻痺で亡くなったオーナーのことです、いやまったく、ややこしい話でございます。

三

そうして一年もしますと、あの人は「ジェフ」の名も板に付きまして、しかし堅気であることに変わりはないのですが、そうしたことをとやかく言う者としていませんから、すっかりジョアンナのみならず馴染んだかのような様子でした。

ことに与三郎にいたっては、かつて夫とともに、ところかまわず逃げ回ったからでしょう、その晩も目の前の止まり木に二人並んで腰掛けておりました。

「またセロリかよ」

と、ジェフの声がいたします。

「チョコレートよりましだ」

「ここはカフェバーだろ。バーボンにでも、しろよ」

「これしか飲めねえ」

「だったら寒ブリが旬だから、そのほうがいいだろう」

「おおッ。そいつァ、たまらねーな」

「ほどよく脂がのった本マグロなんぞ、日本酒には持ってこいだ」

「言いやがるな。もう我慢できねー、姐さん、ちよくら、行って来るぜ」

与三郎は私に断わると、そそくさと席を起っていきました。

——なんてことだい、ジェフまで連れてくなんて！

カウンターの内から二人が出て行ったドアを睨み付けていると、

「ケイ。くちびるが、いたいよ」

ジョアンナの手伝いに雇った夕霧に言われて、私は下唇を強く噛んでいるのに気が付いたのですが、しかしジェフは、どういった料簡で与三郎を焚き付けたのでしょ

う。

あんなふうに煽れば、与三郎が腰を浮かせるのは分かっていただろうから、いい加減、私に愛想をつかせて、ここを出て行きたかったのでしょうか。だけど私にしたところで、みんなの前では体裁振っているしかないでしょう、と敢え無い気持ちでおりますと、

「ケイ、おおめにみてあげて」

夕霧が私の傍に来て、しきりに二人を庇<sup>かば</sup>うのですが、

「ジェフが、しんばいだわ」

と言うではありませんか。

私は、どういうことなの、と訊こうとしたが、ここでもみんなの手前を考えて、どうにか堪えておきました。彼女にはピアノの調律のほうも見て貰っているし、それだけのことで問い質したりしては、お互いに気まじくならないだろうかと、とも思ったからです。

彼女とはニューヨークに留学した折、その音楽学校で知り合ひまして、私が二十二、彼女は十七歳のときで、どことなく東洋人の面影を宿す地元の女学生でしたから、何時でもランチを共にしていました。そのころ彼女はマンハッタンのアパートメントで母親と一緒に暮らしており、その母親はニューヨーク・タイムズの記者だということ、その昔、ニューヨークに駐在していた日本の共同通信社の記者と恋に落ちて、それが縁で彼女が授かったという話でした。その後、私が帰国して何年かすると、彼女は立派にピアノの調律師の資格を取得し、なんでも地元の名だたる楽団で仕事をしていたようですが、その間に何度か失恋の憂き目に遭って、そうなるも無性に父親に逢いたくなくなったそうです。それで私のところに連絡をくれました、私としても、どんな父親なのか興味をそそられたので、彼女が来日すると、さっそく二人して東京の共同通信社を訪れました。そうして彼女をそこに置いてきたのですが、私はその当時ナイトクラブの仕事が控えていたから、彼女とはそれきりになつておりました。それから一年くらいしてジョアンナを設えることになる、およびそ女主人には雇い人が付きものですから、それまで東京で父親と暮らしていた彼女に来て貰ったわけで、いまではジョアンナの近くに部屋を借りて住んでおります。彼女はキャロラインという名の堅気のアメリカー人ですから素性を明かしましたが、だからといってジョアンナで本名を呼ぶわけにもいきませんので、私が「夕霧」

と名付けたのでございます。そのとき彼女は「夕子」か「霧子」のほうが言い張りまして、日本の父親はどんな教育をキャロラインにしていたのでしょうか、そんな名前ではしよっちゅう歌謡曲を聴かされるようだからこれにしないさい、と半ば強制的に承知させたものです。まったく唯物論だか何だか知りませんが、むやみに自我が強くて、ほとほと参りました。

私がそれほど「夕霧」にこだわるのは、お能に「砧きぬた」という曲がありまして、これに出てくる侍女の名前だからでございます。このお能は女主人と雇い人の二人がなくては始まりませんで、と申しますのも、はるか昔のことですが、秋の季節になると、冬の衣類となる布地を板の上に置いたり棒に巻いたりして、つやつやとした絹の輝きを出すために、砧と呼ばれる木製の小槌で叩いたそうです。そういった仕事は、そもそも侍女の役目でしょうが、しかし砧の能においては、九州蘆屋の女主人でありながら、その作業をしなくてはられない孤閨の淋しさ、不安、あてどなさ、砧の音ねとともに、ひしひしと迫ってくるのです——。そうした心のひだに分け入りつつ、夫の愛を喪うしなった深い悲しみ、やるせなさのなかで、なおも砧を打ちつづける女主人が、私には自分のことのように思われるのでございます。

それならここで雇い人の気持ちを考えてみましょう。どうして「ジエフが心配だわ」などと夕霧は口にしたのか、これを砧の能に照らし合わせれば、おのずと分かるように、何時の世にも女が男の身を案じるのは、ほかならぬ感情からにきまっております。そう思って傍らの夕霧をうかがうと、まさしくそんな顔をしています。けれども、こんどだけは違ってほしい、と願うばかりで、もしもそうであったとしても、私としては一抹の望みに縋り付きたいほどに、こればかりは諦めるに諦め切れない想いでして、嗚呼、どうしてこんなことになってしまったのでしょうか……。その晩は何もかも嫌になって、はやばやと自宅に戻りました。お風呂に入るのもおっくうで、ひとまずベッドに腰をおろし、いまいちど雇い人の気持ちを考えようとしたのですが、私の頭は空っぽになったようで、そのうち、とろとろとしてきたから、委細かまわず身にするたぐいを剥ぎ取っていきながら、ふと、あしたは着物にしようかしら、と思いました。

あくる日は、あいにくのことに雨模様でしたが、いつものようにジヨアンナにま  
いりました。

“Say good-bye with smile ちよっぴり泣かせてね わたしはあなたより 未練が

あるから」

と、ひとりピアノの弾き語りをしていたら、ひょっこりジェフが遣ってきました。「ほら、心配すること、なかったでしょう」

と夕霧に言おうとしても、たいがいこの時間は調律の仕事に出掛けていますから、私はカウンターの内に入り、

「何にする？」

こうなったら、そっけなく訊くしかありません。

「コーヒー」

ジェフは私に答えると、そこらの止まり木に腰掛けました。

どんなお仕事なのか知りませんが、ときどき週日の昼下りに見えまして、そうした折は、これまでも私ひとりのときもありましたのに、べつだん何てこともなく、くすぐったいような、ふたりだけの刻ときがながれていくばかりでございました。

それはいまも同じでして、こんなふうは何事もなく過ごしてまいりますと、これ以前のナイトクラブのころから、私が一方的に想っていただけではなかったのでしょうか。夕霧の気持ちを知ったいまとなつては、それに間違いなさそうですが、どうしても諦め切れない夫の面影を追い求めるあまり、その幻影をジェフの姿に視ていたのかもしれませんが。それはたしかにジェフに見詰められながらピアノを弾いていたけれど、彼はジャズやポップスの生演奏に興味があつて、なかでもピアノの旋律に聴き入っていたのでしよう。そうなるとジョアンナに見えるようになってから、彼がピアノの調律師である夕霧を好ましく思ったとしても、なんら不思議はないだろうし、夕霧にしても血筋は争えないもので、ニューヨーク・タイムズの記者をしている母親のように、やはり日本の男性に惹かれるのでございましょう。

ここまで考えると、私は霧が晴れたような心地になりました。昨夜からの空っぽの頭に血が巡って来たからでしょうが、いまのところ稼業のほうも、これといった揉め事はなさそうですし、こうして気持ちの整理が付いてみますと、つらい涙が滲んでまいりました。私の三年にもわたる想いは、いったい何だったのでしよう……。

私はコーヒーの支度を整えると、思い切ってカウンターの端を回って行き、ジェフのすぐ手前の止まり木に、ひっそりと腰をおろしました。こんな大それた態度をとるのは初めてのことでですから、なんとか気を紛らわせようと、その雨を眺めな

がらポップスの調べを口ずさんでみました。

『Say good-bye with smile 笑ってさよならを　しよりよまだすこし　愛しているなら』

そとは雨滴に煙っており、露ほどの人影も見当たりません。

夕霧のことを話すならいまのうちですから、

「好きなんでしょ？」と切り出しました。

「よく分かったな」

ジェフは振りむきもしないで平然とコーフィーを嗜んでおります。これでは一抹の望みを絶たれたのも同然でして、まことに淋しい限りですが、私は黙って引き下がるしかないのでしょうか。

それでもまだ諦め切れず、

「どうして、いままで黙っていたの？」と尋ねますと、

「だから、さ」

と、ジェフは曖昧な返事しかしてくれません。

「だから、どうしてなの？」

またも自分の声が震えていたから、私は気持ちを静めようとして下唇を強く噛み締めると、その瞬間、わけの分からない憤りが湧いてきて、

「そんなに好きなら、くれてやろうじゃないか。金輪際、こんな処に来るんじゃないよー！」

と、いつもの調子で突っ撥ねていました。

私の気持ちなんて分かりはしないのだから、と女主人らしく、きっぱりと雇い人に譲ったのでございます。これで三年にもわたる私の想いに終止符を打ったはずですが、ジェフは何と思われたのやら、さっきから横をむいて、そとの雨を眺めているようでした。

これでは、暖簾に腕押しだわ、と気が抜けた拍子に、

「こうなる時期を待っていた」

ぽつんとジェフが呟きました。

「どういふこと？」

すかさず問い返したけれど、私のなかに感じるものがあつたから、ここは慎重にいかうと思ひまして、「あたしにも分かるように、おっしゃってくださいさらない」と

言い直したら、ジェフは振りむいて、「きみが、好きだから」

私は、それを聞くと、

「素人が、チョツカイ出すんじゃないよ！」

と口を吐いていました。このときは、いわば習い性で突っ撥ねてしまったのですが、しかしジェフにしてみれば、その一言が気に障ったのか、むかひの窓のほうをむいて黙りこくってしまいました。

窓外では、ひとしきり雨が激しくなりました。あの様子だと、私の言ったことを、ジェフは真面まともに受け取ったようです。こういうときは、触らぬ神に祟りなし、と申しますから、この間に話を検あらためるとして、夕霧のことは私の独りよがりの考えだつたと分かりました。これでも学徒動員で駆り出され、のちにGHQのお世話でニューヨークに留学できたとなれば、私がアメリカ人に気兼ねするのは仕方がないのかもしれない。でも私が好きでしたら、どうしてこれまで何も言ってくれなかったのでしょうか。私はまだ信じられない想いで、そとの雨を眺めておりました——こうなる時期を待っていたって、どうということかしら……。ほどなく雨が小降りになるにしたがつて、それを見計らったように——それほどまでに私の気持ちを思い遣ってくれたのだわ。

そのために待っていらしたのか、と胸に熱いものが込み上げて来ますと、さー、何時までも彼を放って置かないで、また勘違いしないように、しっかり訊いておかなければいけないでしょう。そう思うやいなや「どこが好き?」。いきなり口を吐いてから、何という問の抜けた質問だろう、と我ながら呆れていると、ジェフはやっと思ひ直してくれたのか、なんとも艶っぽい言葉を返してまいりました。

「うなじ」と言えば〈女の勘所〉でしょうが、それでも私は、こともなげに「あたしには見えませんわ」と答えておいたのです。そうしましたら、ジェフは「それと、下唇」などと際どいことを口にしました。私は、こんども素知らぬふりで「おかしなところばかり好きなのね」と応じてはみましたが、「まったく、世話が焼けるわね」と言っ止まり木から降りると、ジェフの手を取って、むかひの窓のカーテンの陰に引っ張り込んでおりました。

すばやく好きな男を匿かくまうのは女の本能でして、そこは窓と言っても吹き抜けですし、たっぷりした厚手のカーテンの陰であれば、たとえ誰が来ようと見付かる心配

はありませんから、私がジェフの手を取ったまま、「もう、どうなっても知らないから」とにじり寄っていくと、ジェフはカーテンの隙間をうかがって、「ナイトクラブのオーナーとの、ほとぼりが、すっかり冷めるまで待っていたのだ」と言うのでした。

#### 四

この前の昼下り、私は着物をまとっていたので、ジェフに「ケイのうなじ」と言われたときは、さすがに慌てて——そこは衣紋の抜き加減と言って、けっこう気を遣うのよ、こぶし一つ分くらいが目安だけれど、あまり抜くと下品になるし、などと〈着付けの勘所〉のことを考えたりして、あのときは、いったいどうなってしまうのかと思いました。

あれが恋泥棒の策略だったのでしよう。いまになってみると、私という標的を焦らしたのも策略であって、そのおかげで、なんとも仕合せなことに、まんまと女心を盗まれてしまいました。ですが、そのあと一向に姿を見せないのは、どういうわけなのでしょう。なにしろ恋泥棒ですから、ゆめゆめ油断なりません、取り敢えずは気心が知れた記念に、今宵は、すこし戴こうかしら。

つとワイングラスを取り上げると、夕霧が私の傍に寄り、

「あれから Two - weeks よ。よさぶろう むこうみずだから」と言いながら、手にしたボトルを傾けてくれました。

そういえば与三郎まで気が回らなかつたわ、と思いつつシェリーの爽やかな酸味を楽しんでいると、ガタガタつと音がして、いったい何だろうと振りむいたら、与三郎が息急ぎ切って飛び込んで来て、「姐さん、おねげえします」と慌ただしく断わるや「おう、みんな。ジェフが大変だ、手を貸してくれ！」

にわかに騒々しくなって、これじゃ恋泥棒どころではありませんから、

「お待ちよ！」

先ずは、みんなを制しておいて、

「何をやらかしたんだい！」



と、与三郎を睨みつけました。

「それよりか、はやいとこ行ってやらなきゃ」

「駄目だよ」

「みんなで助けてやらなきゃ」

「そんなこと、させられないよ」

「それじゃなにか、姐さんはジェフを見殺しにするってえのか」

「よく考えてみな」

いくら与三郎が仲間だと思っていようが、ジェフは身内とは言えないのだから、みんなを動員させるなど赦されるはずがないでしょう。

この稼業での掟おきてを怨むしかなかったのですが、それはそれとして、いったん火が点いたら勝手に燃え上がってしまうのが、この稼業の手に負えないところでして、このまま治まるとも思われず、ほとほと困り果てていると、

「やア、与三郎。無事でよかった」

ほどなくして、ジェフが遣ってきました。

「おうッ、なんともなかったか。いま、みんなで押し掛けるところだった」

「そんなことだろうと思った。みなさん迷惑をかけたな」

ジェフはこう言うと、私に目配せただけで帰ってしまいました。

「いきなりだぜ。ヤツが隠し持った木刀を奪い取るが早いか、いきなり叩きのめした。なんてったって目にも止まらぬ早業ってえのは、あのことだろうぜ」

そのあと与三郎が勝手に喋り出したから、

「ちゃんと分かるように初めから話さない」

私はジェフの物腰からして徒事ではないと思っていました。

「へえ、なんだっけ。……そうそう、ジェフと二人で〈浮舟〉に行ったんだ」

「あの料理屋の辺りは〈松風〉のシマでしょう」

「だからよう、〈浮舟〉に入って行くと、瘦男やせおとこに見付かっちゃって」

「また、わるいヤツに出くわしたものだね」

「あとは、さっき言ったとおりで」

「瘦男が隠し持った木刀を奪い取って、いきなり叩きのめした。お前がかい？」

「いや、ジェフが」

「そこが大事なんだよ。もういちど話してごらん」

「えーと、おもてへ連れ出されやして、『こいつは?』とジェフのことを訊くもんで、うちの客人だと教えてやったら、ジェフのほうは放っておいて、こっちに殴り掛かってきやした」

「客人だからって油断したんだね。それで瘦男はジェフにやられたんだ」

「いや、違うんで。やられたのは子分のほうで」

「なんだよ。そんなことで逃げ帰ってきたのかい」

「それも違うんで。ジェフに子分を叩きのめされて、ヤツが黙ってるわけがねえだろう、すぐさまピストルを取り出しやがった」

「ええッ」

「姐さん、そんなに驚かないで。このあとが凄い。ジェフはピストルをむけられた途端、その腕を払い落とした。だけど、たぶんヤツの人差し指は引き金に掛かっていたんだ」

「そこ迄でいいよ」

しかしジェフも思い切ったことをやってくれたものです。この前の昼下りに、私が突っ撥ねたせいでしょうが、とんでもない事態になってしまいました。

こうなったら、速やかに手を打つしかありませんから、

「いまの話は誰にも言うんじゃないよ」

と、みんなに申し渡し、与三郎には、

「アジトに身を隠しな。手伝いの者は遣るから、絶対に外へ出ちゃ駄目だよ」

それから夕霧にピアノを弾きつづけるよう申し付けると、いまさつき裏口に呼んでおいたタクシーに乗り込み、いつものように自宅へむかわせ、しばらく走らせておいて、急きょ行き先を変えたのでした。

やがて映画館の前でタクシーを降りると、それとなく背後をうかがいつつ、その横の細い路地を伝って映画館の裏手に回って往きました。真冬の夜のことですから、私は黒いカシミア・ウールのコートに身を包んでいましたが、その建物のコンクリートの階段を踏んで往くにつれて、ひんやりと冷気が立ちのぼって来るものから、私の細身の軀に震えが走りました。そのとき突然ネコが現れたかと思うと、こっちを見て、やさしい声で鳴きました。それでもようやく四階の部屋の前まで来て、おもむろにドアをノックしていると、「よく分かったな?」と訊いてまいりました。

その口振りは、まぎれもなく恋泥棒のジェフでございます。

「与三郎に聞いてきたのよ」

と答え、ドアチェーンが外れるのを待って足を踏み入れました。

がらんとした洋室で、かすかに消毒薬の匂いが漂っていました。ドアの脇にあるポールハンガーに、見慣れたコートとソフト帽が掛けられており、むこうにはお勝手も備わっているようですが、手前の壁際に幾つかの衣装戸棚、二つの大きな本立で、その横に机と椅子、それと奥のほうに広いベッドが据えてありました。

「寒くない？」

このとき白い半袖姿の二の腕に気が付いたのです。

「ああ、失礼」

ジェフはシャツでも取りに行くのか部屋の奥にむかいました。あのような手傷を負っているながらジョアンナに寄ってくれたから、私は窮地を救われたけれど、ジェフのほうは急いで部屋に戻り、ひとりで傷の手当てをされたのでしょうか。この匂いはそのときのもので、おそらく消毒薬の沁みる痛みに耐えながらガーゼを当てたり包帯を巻いたり、やむなく片手でもう一方の腕の傷をかまうしかなかったのでしょうか。

そう思うと、ふいに鼻腔が突き上げられるようになって、もう居ても立ってもいられない気持ちでジェフを追って往き、その背中にしがみ付いておりました。

「初めに手を出したのはオレだから」

それから、しばらくすると、ジェフは真剣な顔で言い始めました。

「〈松風〉に行って話を付けよう、っていうのかい？」

「そうしなければ治まらないだろう」

「それじゃ訊くけど、他人ひとに見られたとか拳銃の音を聞かれたってことは、ないのかい」

「いや、誰もいない高速道の下だ。ひっきりなしにトラックが走っていたし、拳銃の発射音など掻き消されてしまったさ」

私はそれを確認するために、ここへ来たのだから、

「たしかに撃ったのは瘦男なんだね」

と念を押しました。

「間違いない。かわいそうに、地べたに突っ伏した子分の頭から血が垂れていた」

「そこまではつきりしてるんなら、それだけで充分だよ。それより一刻も早く姿をくまますことだよ」

「先立つものが」

「そんな心配はいいんだよ。あたしと一緒に旅に出よう。こんどは『素人が、チョッカイ出すんじゃないよ』なんて言わないから」

それは逃避行というより、しのび逢いというに相應しい道行でございました。

やがて旅行から戻ってジョアンナに顔を見せると、

「あれから『Two - month』よ。なにしてたの?」

夕霧が訊くものですから、この間ジェフを伴っていた話を夕霧にしていると、そのあいだにも次々と支部のみんなが集まって来ました。やたらと鼻が利く者たちですが、こんな昼間から仕事のほうはいいのかしら。それこそ余計な心配をしていると、みんなを束ねる者が、およそ私の気分にごぐわな顔をして、あたふたと遣ってきました。

「姐さん、お待ちしておりやした。実は……、申し訳ないんですが……」

「なんなの?」

「与三郎が、ひと月ほど前に……」

「そんな恐い顔で、どうしたんだい?」

「殺されやした」

「えッ」

「そのことで〈松風〉が来ておりやして」

「なんですと!」

こうなったら急いで覚悟を決めなくては、と氣を引き締めようとしたら、

「ケイさん、やっと戻りましたな」

〈松風〉の親爺さんがジョアンナに入ってきました。

「姐さん! 大丈夫ですか」

みんなが口々に心配してくれたが、それなりに由緒ある出自は、なまじ伊達ではありません。

「あたしに任せておきな」

いざとなると、たいがいの者は私に敵わなかったのです。だからこそ、どんなに跡目相続を拒まれようと、本部を率いる父は諦め切れないのでしょう。

「殺ったのは瘦男だね」

このさいズバリと切り出しました。

「はい。とんでもねえ野郎で、そこまで根性が腐っているとは知りませんでした。てめえの落ち度を誤魔化そうと目撃者を抹殺したに違えありません。そんな仁義にもとる野郎は庇ってやれないから、その日のうちに警察に突き出してやりました。ケイさん、そういうことですから、客人にも安心するように伝えてください」

「キヤクジンじゃないよ。ジェフはケイのダンナになったんだ」

突然、夕霧が口を挟んできました。

何もこんなときに言い出さなくても、と私は戸惑いながらも、みるみる周りの雰囲気や和やかになるにつれ、まるで娘のように顔が火照って仕方がなかったのをございます。

その晩は久しぶりに自宅に戻り、二人してディナーを楽しんでからベッドに入りました。そうしてどれくらい経ったでしょうか、枕元の電話の呼び鈴が鳴りひびき、その音で眠りを醒まされたのです。

「なんなの、こんな遅くに」

本部を率いる父からでした。

「なにか良くないことでも？」

「その前に、おめでとう、と言っておこう。こんどこそ仕合せになるよう祈っているよ」

「うん。父ちゃんも、元気でいる？」

「その齢になって、父ちゃん〴〵は、ないだろう」

「あたしを男手一つで育ててくれた。どんなときにも忘れないでいるよ」

「大事な一人っ子だから、そんなこと当たり前だ。おまえが生まれるとすぐに、あいつは、わしの矢面に立って亡くなってしまった。おまえは可愛かったよ。なんにも知らずに日に日に大きくなってくれた。そのうち、わしの顔を見て、にこにこ笑うようになった」

「長崎の教会で式を挙げただけど、せっかくなら父ちゃんと手をつないでバージン・ロードを歩きたかったわ」

「そうか、その気持ちだけで嬉しいよ。それでな、ようやく帰って来たからと夕霧が報せて寄こしたので、なるべく早くおまえの耳に入れておこうと思ったのだ。こ

の神戸は久しく穏やかだったのだが、またも不穏な動きが出てきたのでな。ずっと前の檀那のときは、おまえの怒りを買ってしまったが、こんどもそうならないうよう充分注意したほうがいい。おまえが跡目相続をどんなに拒んだからといって、世間じゃそうは思っていないようだ。ましてや対抗組織はこう考えるだろう。——何時かは本部を率いるだろうが、いくらなんでも女を相手では物笑いの種になるのがオチだから、いまのうちに檀那のほうだけでも息の根を止めておくに限る。……」

私は夜半時のこともあってボーとしたまま受話器を置いていました。いまだに事後の余韻に浸っていたからですが、しだいに意識がはっきりしてくるにつれ、これは大変なことになってしまった！ それに気が付くと、途端に身震いしてきたので、くるツと、うしろに寝返るや夫の軀にすがり付いていきました。

「ん、どうした？」

ジェフは気配を察したのか、すぐに応じてくれたが、

「なんでもないの、ゆっくり寝ていて」

私はしかし、その先を考え始めていました。

そんなこととは知らないで、かつて二つの位牌を前に涙をこぼしていたけれど、あのとき父は、いま電話で言ったような話をしたら娘が可哀そうだと思ったのでしよう。その父も、ことしは喜寿を迎えたから、この話はますます現実味を帯びてきたのだろうか。けれど二人の夫の息の根が止められたのは十年余り前のことだし、そうになると、父の年齢にかかわらずジェフの身に危険が迫っている、と考えたほうがいいだろう。

## 五

とにかく、これは、私を狙った陰謀には違いないのですが、その矛先を私の夫にむけようとするもので、なんとも陰險な遣り方だと思われませんが、かといって、そうとばかり嘆いてもいられませんから、私もよくよく思索し、夫は、つまり私の四番目の夫のジェフは、私の雇い人の夕霧とともにニューヨークに逃がすことにしました。それにしても長崎の教会で挙式してから然程も経たないのに、この業

界の情報網ときたら、この世とあの世を行き来するというネコのように、なんと素早い動きなのでしょう。そこへいくとナイトクラブのオーナーの許に後妻に入ったときは、このまま収まってくれたらと言うことなのでしょうか、むしろ平穩なものでございました。

そのころから私は、オーナーには申し訳なかったけれど、密かに若いジェフを愛おしく思っております。ですから〈松風〉の事件を契機にジェフと道行を重ねているうちに、私のうちで、しのび逢いだけでは辛抱できなくなって、とうとう堅気のジェフを身内にしてしまいました。どうかいっしょになってください、とジェフに頭を下げて頼んだのは、ついこの前のことのようにございます。その夫を、私のせいで、とんだ勢力争いに巻き込ませてしまいました。なんとしても、父の言う狙撃人の手に掛けさせるわけにはいきませんから、そんなことになる前に、私は何時でも自ら生命を絶つ覚悟はできております。もとより私さえいなくなれば陰謀は叶うわけですが、しかし私にしたところで、女の四十路を前に、ようやく掴んだ仕合せに未練がありますから、もしかして夫がニューヨークの街の雑踏に紛れ込んでしまえば、いかな狙撃人といえども、その目を逃れられるのではないのか、と一抹の希望を捨て切れないで、いまでは来る日も来る日も、そのことばかり考えて生きているのでございます。

いっぽう与三郎には申し訳ないことをしたが、そのおかげで〈松風〉との和解が成立し、いまや博多は平穩そのものなので、夫を逃がしてからどれほど月日がながれたのか、ちかごろは支部のみんなもジョアンナに顔を見せることもなくなりまして。だいたいが、こういう稼業は時代遅れといえますか、この業界そのものが廃れていくのですから、父の率いる神戸の本部も、いたずらな勢力争いなど止めてしまえばいいのです。むしろ私が勢力争いに加勢することも、まして父の跡を継ぐつもりもございませんのに、それでも理不尽なしっぺ返しを受けるとは、まったく赦しがたい暴挙と言うしかありませんが、その組織のせいで夫を奪われ、愛を喪った女は、どうして生きて行けというのでございましょう。

それからも容赦なく月日はながれ、

それ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁いあり、ましてや深き妹背の中、同じ世をだに忍草、我は忘れぬ音を泣きて、袖に余れる涙の雨の、晴れ間稀なる心かな

綿々として尽きない怨みを胸に、きょうもひとりでピアノにむかっていると、こともあろうに夕霧が現れて、「あれから Two - yearsよ。ことしの暮には帰れるだろう」と夫からの言付けを伝えるのですが、私はべつに嬉しくもなく、おのずと華やかさがうかがわれる夕霧の姿に——いかに夕霧、めずらしながら怨めしや、という想いでございました。夕霧は夫とともにニューヨークに行かせた女ですから、余りに長い年月ひとり淋しく待ちつづけている私には、しばらく見ないあいだに日本語も馴れてきた夕霧に、これまで一緒に暮らした夫の匂いがまつわりついているように思われて仕方がなかったからです。

そしてまた、ひとりで帰って来た夕霧を目の当たりにして、おそろしい予感で背筋が寒くなりました。そうした不安な日々を送っていると、ある晩、何処からか砧の音が聞こえてまいりました。あれは漢の蘇武そぶの妻子たちが、万里の遠きにある夫の身を案じて砧を打っているのだろう。私は能「砧」のなかの故事を思い浮かべ、ならば自分も、そのようにしましよう。

さあ昼夜をたがわず鍵盤を打とう、あれほど夫に見詰められながらピアノを弾いていたのだもの、あの人はジャズやポップスの生演奏にことさら興味があつて、わけてもピアノの旋律には敏感なのだから、きつとこの音色に気付いてくれるでしょう。

ことに夕べにあつては、本部の対抗組織への怨みをこめて、ピアノの鍵盤を打ちつづけました。——まことまさしく秋の夜長、鍵盤を打つ千の音、万の音で、このつらい胸のうちをあの人に知らせよう。月の色、風のおもむき、月光のもとの霜までも、ぞっとするほど荒涼としたこのとき、ピアノの音色も、夜嵐の声も、悲しみに泣く声も、草にすだく虫の音も、露も涙も、ほろほろ、はらはらはらと、あらゆる秋の音が入りまじって、いったいどれがピアノの音色だろう。

しかしながら、まじりあい、ひびきあう秋の音に、こころを慰められるどころか、ますます絶望の淵に落ち込んでいくのでした。やがて、それは、なんとも非情な報せとなつて、夕霧の口からもたらされたのでございます。

「ただいま届いた便りによれば、ことしの暮にはお帰りになれないとのこと」  
それを聞くと、ピアノをしまい、

「ジョアンナのなかを綺麗に片付けてから家に来るように」と夕霧に申し付けて、ただちに自宅に戻りました。



思えば、しのび逢いというのは、もともと危ういものでしょうが、私の考えが至らなかつた為に、あの人を危険な立場にさせてしまいました。

——あなた、ごめんなさいね。あなたが長いあいだ逃げ果せたのは、ひとえにニューヨークの街中を知り尽くした夕霧が、あなたに付いていたからでございましょう。それをあなたは、私のことが心配だからと、彼女を手放しておしまになるから、ついに身動きできなくなってしまったでしょう。

私はベッドに腰をおろし、まもなく夕顔が遣ってきたら、すぐに決行できるよう、傍らに置いた拳銃の安全装置を外しておきました。なにしろ雇い人の夕霧のことで、女主人の私が自ら生命を絶つたとなれば、たちまち大騒ぎするでしょうから、そこは情報網のはたらきにより、一刻も早く狙撃人に手を引かせなければなりません。ああ、申し遅れましたが、ただいまニューヨークで逃げ回っている夫は物書きでして、「いずれ、ほとぼりが冷めたら、ケイのことを女語りで書くのだ」と言っておりまして。

さあ夕霧が来るころですから、いよいよ覚悟を決めていると、枕元の電話の呼び鈴が鳴りひびき、私の全身凍り付くほどに、ぞっとしました。

「おい、夕霧が帰っているようだが」

てっきり夫のわるい知らせだと思ったのですが、本部を率いる父は、

「なんでジェフは戻らないのだ」

と訊きますから、私は最期に父ちゃんの声を聞いて、なんだかやたらに嬉しくなり、

「いいじゃないの、女房をやきもきさせたいんでしょ」

と答えていました。

### (第10回銀華文学賞入選受賞の言葉)

世の中の不条理と人の真実を描いたものだが、これがそのままケイという女の悲恋物語となっている。あれは日立製作所で設計技師をしていた時のことだ。僕はまだ若かったが、新製品の説明をしに九州の博多に長期出張し、営業と一緒に建築設計事務所を巡っていた。そして夕べの灯火が燈るころになると、そのころから怪しげな処に目を付ける習性があったらしく、とあるカフェバーに紛れ込んで、どうやら内密の話が聴けたと悦にいつていた。ずいぶん昔のことなので曖昧にしか憶えていないが、銀華文学賞の記念すべき十周年に当って、この話を書こうと思いついたのだ。

そうかと言って、ケイの男遍歴を順繰りに紐解いて行ったのでは、とうい五十枚には収まらないであろう。こういう場合は最後の男の側から書くという手がある。しかし、それでも八十枚ほどになってしまったから、ここはひとつケイの独白だけに見よう。その代わり、いまは恋しい、と題名に付加することにした。こうすると、その男が、いまは亡きケイを偲んで書き記したということになる。それゆえ当初の思惑通り、この話は、いわば世の中の不条理に挑んで懸命に生きた一人の女へのレクイエムとも言える。



佐山雄次